

# 国際的リゾート沖縄の改善すべき諸問題について

## —そのソフトの方策と提案—

吉 川 道 雄

### 1 はじめに

わが国で唯一随一の亜熱帯地域として特有の自然景観を有する沖縄県は、県下各地域で優れたリゾート資源を活用すべく多くのリゾート開発が計画、運営、実施されつつある。沖縄県では昭和61年（1986）に「沖縄県観光振興基本計画」を策定し、その中で①観光レクリエーション重点整備地域を定め、②観光受入れ体制の整備③観光関連産業の振興を計り、平成2年（1990）には「リゾート沖縄マスタープラン」において①優れた国際的リゾート沖縄の姿を描き、②リゾート産業を沖縄の戦略的産業として位置づけ、③リゾート開発を「秩序と調和のとれたもの」にすべく策定した。平成3年（1991）には沖縄トロピカル・リゾート構想（総合保養地域に関する基本構想）が発表され、「国際的規模の観光保養地域の形成を図ること」を目標としている。このような背景のもと沖縄県特に沖縄本島におけるリゾート地域に共通の諸問題を提起し、ここでは特にそのソフトの側面について考察する。

### 2 沖縄トロピカルリゾート構想にみる沖縄本島の特性を地域別にみると、次のようになっている。

#### (1) クイナヒルズ・リゾート（塩家・奥間海岸地区）

大宜味側の内海、高原型の地形、国頭側の海浜ビーチをもつ地区の特性を生かし長期滞在型リゾートを中心にした複合リゾートの形成。

(2) サングリーン・リゾート (北部東海岸地区)

冬場の温暖な気候条件を生かし健康保養型リゾートを中心に高齢者向けの定住性の高いリゾートの創出。

(3) エキスポ・リゾート (本部地区)

国営沖縄記念公園海洋博覧会地区、アクアポリス、琉球大学熱帯海洋科学センター、青少年旅行村等が集積し海洋文化、レクリエーション、熱帯、亜熱帯研究の場として国民的そして国際的なマリンカルチャー・ビレッジの創出。

(4) サンライズ・リゾート (宜野座海岸地区)

特色ある海岸線を活用した海洋性レクリエーション並びに田園的で静かな環境の中での研修保養型リゾートの形成。

(5) ラブリーサンセット・リゾート (恩納海岸地区)

沖縄海岸国定公園の中にあり沖縄の代表的な海岸景観を有し、既に7つのリゾートホテルが立地しわが国でも有数のリゾート地区である。個々のリゾートスポットを連載させ、多様なマリンレクリエーションの展開、ビーチパークの創出と複合海浜リジャー型リゾートの形成。

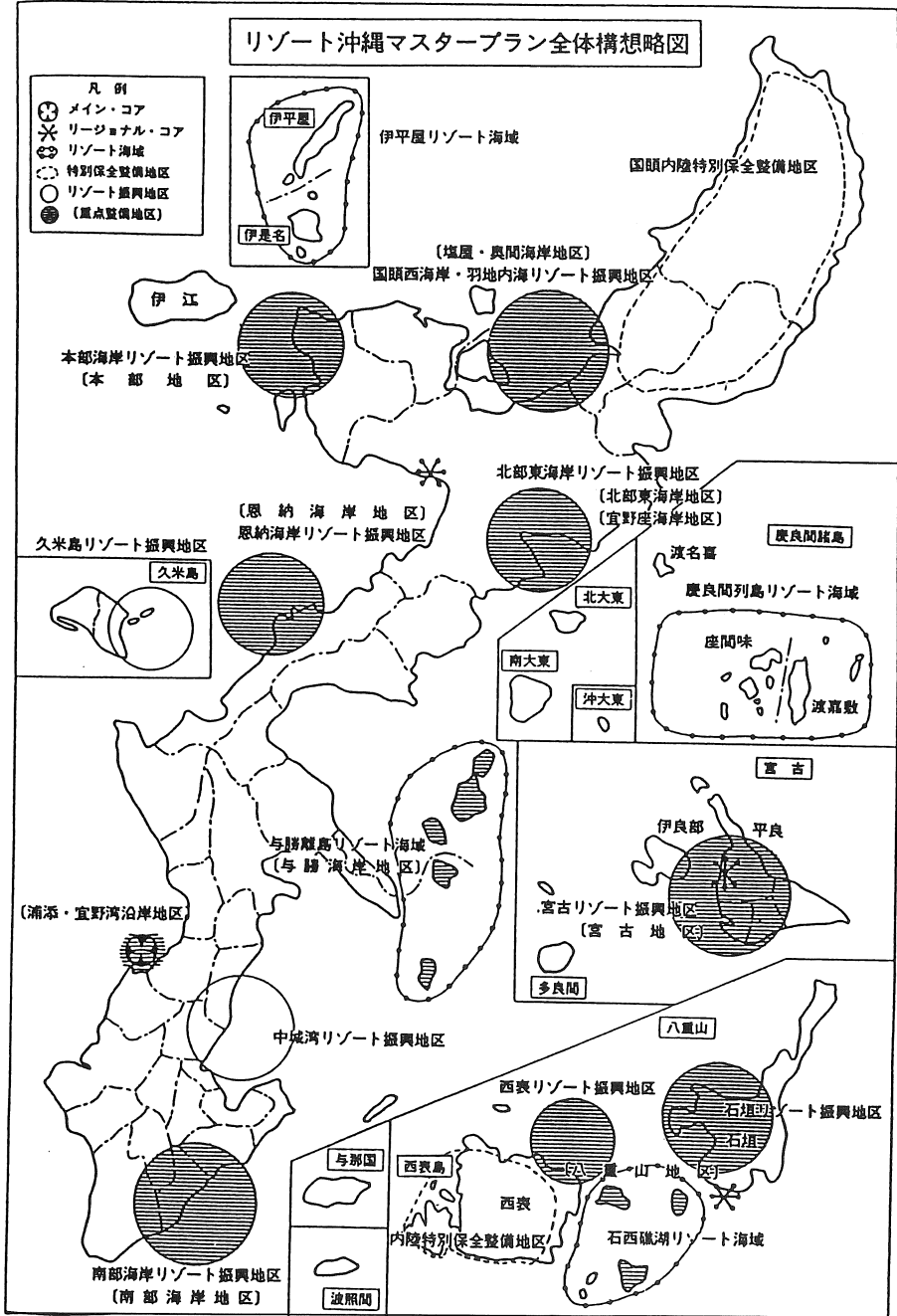
(6) パシフィックガーデン・リゾート (与予勝海岸地区)

静穏な浅海域や島々の特性を生かした都市近郊型のマリンスポーツ型リゾートの形成。

(7) サザンビーチ・リゾート (南部海岸地区) 平和記念公園、歴史文化遺跡、

玉泉洞、サボテン公園等が集積し周遊型観光地である。那覇市の都市機能を活用し温泉を利用したヘルス케어型リゾートの形成。

図-1



沖縄本島におけるこれらの地区を相互に有機的に連携を図り、交通ネットワーク等を整備することにより一体化、統合化を促進し国際的観光リゾート地を目指し、イメージとしてはハワイを描き、開発を進めるとしている。

### 3 交通基盤 —その点と線—

沖縄本島は全長約140kmの細長い島で、交通手段は全て自動車に依存している。メインゲートである那覇空港と、各地区とを結ぶ交通網は徐々にではあるが整備されつつあるが、しかし主要観光ルートにおける日常的な交通渋滞の解決は、観光産業として重要な問題であり、新しい交通手段をも含めた交通網の抜本的改革が求められる。舗装道路についてはかなりの密度を保持しているが、その質となると沖縄自動車道のみで、ハワイの1級ハイウエー、街区ハイウエー、2級ハイウエーと比較するとかなりの格差がある。

現在では、那覇空港からバスで名護まで約2時間（1620円）、奥間地区まで約3時間（2450円）、本部港まで約2時間50分（2170円）とかなりの時間がかかる。このことは観光客の滞在時間を圧迫し、その自由な行動範囲に大きな影響を与える要因となっている。

図 2-1 重点整備地区（予定）間のアクセス

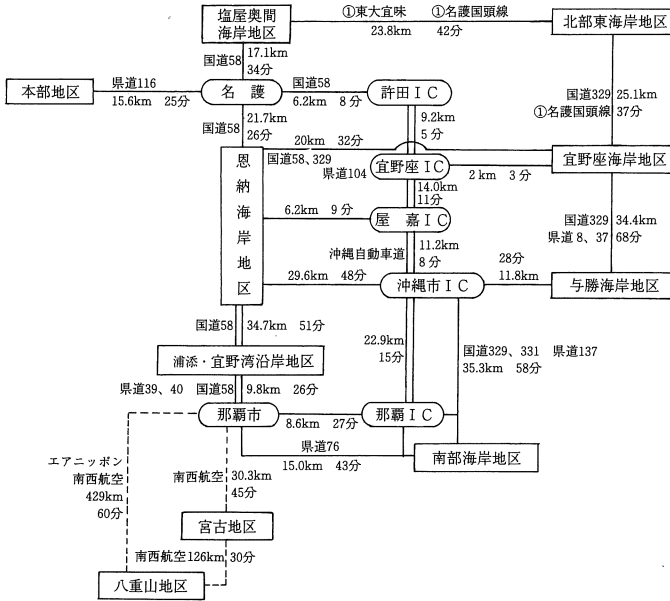


図 2-2 空港～各リゾート 路線バスと料金  
時間（約）  
バス会社 4 社

バス会社	路線	時間	料金
高速バス	空港 → 那覇バスターミナル	20分	170円
	那覇バスターミナル → 各リゾート	乗換え	
100分 1840円	残波岬ロイヤルホテル	60分/80分	920円
	ラマダ・ルネッサンスリゾート	70分/90分	910円
	ホテル・ムーンビーチ	75分/95分	970円
	万座ビーチリゾート	80分/100分	1140円
	ホテル沖縄みゆき	90分/110分	1240円
	かりゆしビーチリゾート	100分/120分	1330円
タクシーで5分	名護駐待機場 → 名護バスターミナル	乗換え	
	名護バスターミナル → 各リゾート	120分/140分	1620円
	リゾートホテル・ハヤシ		600円
	ベルモア東洋		540円
	ホテル・オリオン	40分/180分	550円
	本部グリーンパークホテル	50分/190分	620円
	ロイヤルビューホテル	55分/195分	680円
ヴィラ・オクマリゾート	60分/200分	830円	
	記念公園		1990円

滞在日数（昭和63年）は3泊が最も多く34.8%、次が2泊の31.6%であることから交通にかかる所要時間は、観光行動にとって重大な意味を持つてくることになる。平均滞在日数では沖縄4、5日、ハワイは9、7日に表現されていることは、基本的な観光行動を律する社会基盤の中でも、最も重要な交通基盤の整備の重要性を、指摘していると考えられる。

表-1

13 平均滞在日数

昭和55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年	62年	63年
4.78日	4.85日	4.77日	4.57日	4.52日	4.53日	4.48日	4.32日	4.32日

資料:観光要覧

つまり、限られたわずかな日数での時間の有効利用の、交通網の未整備による減少は自由時間、周遊時間、ショッピング時間等の減少と、体力的な疲れを意味している。

つまり、沖縄の地区内での交通網についてみれば、観光客にとって未整備であり、全く無いに等しい。例えば、観光客は団体客であれ個人客であれ、宿泊先（ホテル）に到着したあと、ホテルを基点として自由に行動することは、ほとんど不可能に近い（無論、高額なタクシーを利用すれば別である）。したがって観光客はホテルによって用意されたハードの施設（プール、レストラン、ショッピング・アーケード、バー等）のみを利用して、自由時間を過ごすことになっている。ホテル周辺地域の各種情報（飲食、民芸、芸能施設、アクセスその他）についても、ホテルからは、発信されていない。

#### 4 沖縄の気象

わが国唯一の亜熱帯性の温暖な気候を有する沖縄で特に注目すべきは観光シーズンのピーク時に雨天の日が多く、また雨量も多いことである。例えば最も観光客が多い8月では、1988年、1989年、1990年の調査によれば、雨の日（雨、小雨）はそれぞれ、16日、14日、15日で晴の日（快晴、晴）は14日、13日、13日曇の日は1日、4日、3日となっている。気候を、世界有数のリゾート地であるハワイ州オアフ島と比較すると、降水量において那覇市のほうが約4倍多

いことがわかる。ハワイの平均気温の月別差は、僅か4度であり、沖縄は12度で平均湿度は76%である。沖縄としては、悪天候と湿度が大きなハンディーとなっている。(表2-1, 2-2, 2-3, 2-4, 図1参照)

表2-1

▼ハワイとの比較

	沖 縄 県		ハ ワ イ				合 計
	沖 縄 本 島	合 計	オアフ島	マウイ島	カウアイ島	ハワイ島	
	那 覇 市		ホノルル空港	カフルイ空港	リフエ空港	ヒロ空港	
気温・年間平均	23.1		25.5	24.2	24.0	23.1	
(°C)月間平均最低	16.1		22.6	21.9	21.8	21.7	
〃 最高	28.7		27.2	26.2	26.2	24.3	
降 水 量 (cm)	210.9		59.6	50.4	111.8	325.5	
温度(%)年間平均	76		64	66	72	74	
位置(東京から)	1,70		6,190				
(km)(サンフランシスコから)			3,866				
(ホノルル空港から)				158	166	344	
面 積 (km <sup>2</sup> )	1,216	2,254	1,600	1,902	1,446	10,451	16,750
人 口 (人)	1,108,791	1,213,867	816,700	78,700	46,100	111,800	1,068,200

資料:沖縄公庫レポート (No.20)

(注) 人口:沖縄県……1988年10月1日  
ハワイ……1986年

表2-2

1 本県の自然条件

▼ 気 象 (那覇市)

事 項	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間	
気 温 (°C)	平均気温	16.0	16.4	18.0	21.0	23.7	26.1	28.1	27.8	27.1	24.3	21.3	18.1	22.4
	最高気温平均	18.6	19.1	20.9	23.9	26.5	28.8	31.0	30.6	29.9	27.0	24.0	20.8	25.1
	最低気温平均	13.7	13.9	15.6	18.6	21.4	24.0	25.9	25.6	24.9	22.0	19.1	15.8	20.1
	極 高	26.2	26.2	26.9	29.7	31.6	33.7	33.8	34.0	33.0	31.3	29.7	26.9	34.0
	極 低	6.6	6.6	7.2	10.4	14.0	16.7	21.2	20.7	18.5	14.8	12.2	7.2	6.6
日照時間(時間)	108.6	108.6	132.5	161.2	160.4	197.2	274.1	254.4	222.9	180.9	134.2	121.0	2047.2	
快晴日数(日)	0.9	0.8	0.9	0.8	0.3	—	0.2	0.4	0.8	1.2	1.2	1.2	8.5	
月平均降水量(%)	119.6	117.9	143.9	168.1	248.9	292.6	192.6	260.1	166.4	186.2	141.7	116.5	2128.2	
相 対 湿 度 (%)	70.0	73.0	75.0	79.0	83.0	86.0	81.0	82.0	79.0	75.0	72.0	70.0	77.0	
平均風速(m/秒)	4.3	4.6	4.3	4.3	4.4	4.8	4.4	4.7	3.9	4.7	5.3	4.5	4.5	

(注) 1. 気温は極高、極低以下平年値。

資料:沖縄気象台

2. 快晴日数は日平均雲量15%未満の日数の平均値。

3. 主に1951~1980年の平均値である。

▼平均気温・年間降水量

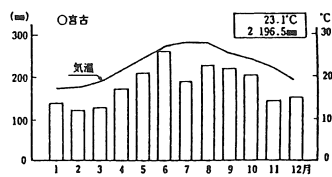
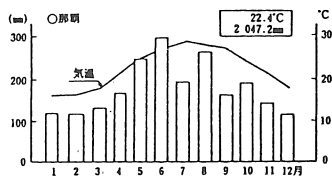


図 1

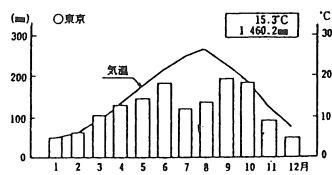
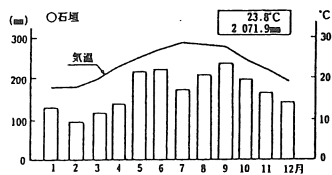
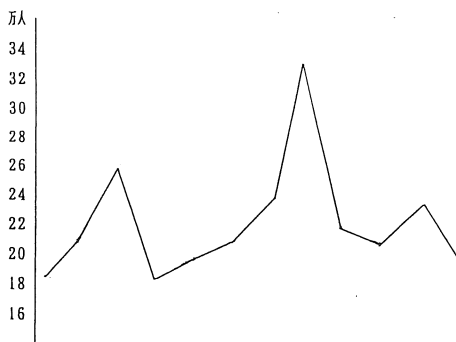


図 2

表2-3

月	雨雲	晴
1	68	32
2	46	54
3	46	54
4	60	40
5	71	29
6	47	53
7	71	29
8	58	42
9	57	43
10	20	80
11	58	42
12	55	45

月別 観光客の推移 平成元年度



月別 天候の変化 平成元年度

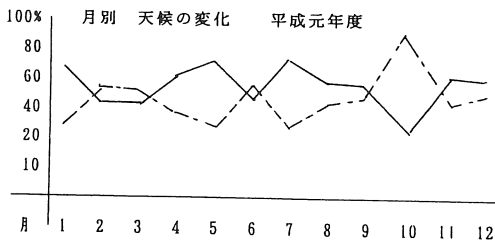




表2-4

1989年 那覇市の天候  
(気象年鑑 気象庁)

月	雨	小雨	曇	晴	快晴	雨雲対晴割合	
1	4	6	11	9	1	68	32
2	0	8	5	14	1	46	54
3	5	3	6	17	0	46	54
4	8	6	4	12	0	60	40
5	10	3	9	9	0	71	29
6	4	3	7	16	0	49	53
7	3	6	13	9	0	71	29
8	12	2	4	13	0	58	42
9	8	6	3	13	0	57	43
10	1	1	5	23	1	20	80
11	5	5	7	12	1	58	42
12	5	1	11	13	1	55	45

沖縄県では夏場市場（4月～10月）と冬場市場（11月～3月）に分けている。（図2参照）夏場市場では、マリンレジャーが主となり冬場市場では、保養、観光スポット周遊が主となるが、この二つの市場でより天候に依存するのは、夏場市場でありマリンレジャーであることは間違いない。つまり、夏場市場では天候が晴れていれば、自然が与えた素晴らしい海と、ビーチがそのまま最高の施設としてハードの役割を果たし、その素晴らしさゆえに、ソフトの必要性さえ忘れさせることにもなるが、曇天、雨天になった場合には、イメージとしてのこの最高の施設は、期待外れの不良品となり、使用不能という最悪の状態にさえなるのである。雨の長崎、霧の摩周湖など、一般的には観光・リゾート

としてはマイナス要因である気候風土を、巧みにプラス要因のイメージとして定着させ成功している例を述べるまでもなく、沖縄では「東洋のハワイ」、「美しい海そしてビーチ」での「ハレ」の海浜リゾートのイメージが先行しているあまりに、亜熱帯地域としての沖縄、風土・気候が作りあげた文化・県民気質・環境などの観光資源が置き忘れられているようにみえる。

## 5 考 察

以上のことから沖縄本島には次の問題が提起される。

(1) 7つの、それぞれ異なった魅力ある特性を持つ観光リゾート地区が、大動脈によって有機的に結ばれていないこと。(2) 台風の常襲地帯であり雨量も雨天日も多い地域にもかかわらず、その対策が、特にソフト面についての問題意識が希薄である。(3) 地区内にある観光施設（リゾートホテル、レストラン、伝統文化施設、画廊、市場等）相互の提携、および連携が生かされていない、それぞれが囲い込み型となっていること。

### (1)の問題を考察する

観光立県沖縄が、国際的観光リゾート地となるには、沖縄のメインゲートである那覇空港からの多動脈アクセスが必要不可欠であることは論を待たない。現在、那覇空港ターミナルビルは平成10年をめざして総工費1000億円を投じ整備が進行中であり、また、那覇市から名護市までの沖縄自動車道は約2000億円の工費で那覇空港まで接続されることになっているが、クイナヒルズ・リゾートまでの延長は、将来の問題として残されている。しかし、一方では道路開発による環境破壊が、大きな問題として地域住民の反感をよんでいる。この環境破壊問題としては、リゾート開発による上水供給の増加に伴う、ダム建設計画にも関連しているが、いずれにしても、那覇空港からクイナヒルズまではかなりの時間が必要となり旅行出発地点から那覇空港、そして目的地までの所要時間の短縮は、緊急課題であることにはちがいない。

特に北部リゾートについては、新道路建設よりも現道路の拡張および舗装に

加え、環境破壊、森林破壊をする事なく、短時間で那覇空港とアクセス可能な、「ヘリポート」、またはそれに準じる「小規模空港」の建設が望まれる。小規模空港であれば用地も少なく、建設費も安く、環境破壊、森林破壊の被害も最低限におさえることができること。ヘリおよび小型飛行機（20人前後用）によるピストン輸送は、クイナヒルズを北部の基点とすることができること。ヘリおよび小型飛行機は遊覧飛行にも利用でき沖縄を陸・海・空と立体的化できる。空から見る珊瑚礁の美しさの鑑賞、特に沖縄本島では、海のかなたや海底に異郷があると信じられている。それを「ニライカナイ」（海底の浄土）と呼び、「竜宮童子」、「浦島太郎」、「竜宮女房」などの伝説もあり、それらに思いを馳せることにより、沖縄の地域的特色であり沖縄の人々がもつ宇宙観を知ること、は、沖縄の大きな文化資源といえるだろう。「知価」は最近では流行語のようによくつかわれているが、観光においても同様である。知価は「価値観」に関連するが、沖縄県民の価値観が日本本土とは決して同じではないことを知ることは、また、観光の側面としての教育的観光を充実させることにもなる。

一方国民の旅行志向は、マスから個へ、パッケージからFIT（個人自由旅行）へ、静（見回り）から動（スポーツ、体験等）へと、変質しつつある、また貸切りバスを利用する団体旅行から、個人で交通機関を利用する旅行へと、利用交通手段も変化しつつある。

このような状況のもとで、沖縄の現況は、ソフト的工夫がより必要と考えられる。一般的には、旅行者であれリゾート客であれ、那覇空港からの「アシ」は、バスもしくはタクシー、レンタカーに限られるが、団体客専用の貸切りバス、特定ホテルと特定航空会社によるシャトルバスを除けば、個人客に対しての「アシ」（バス）の発着便数、所要時間短縮のための急行便、特急便数が十分でなく、高額なタクシーを利用しなければならないようなシステムが出来上がっているように見える。今後の緊急な課題として、FITを中心に据えた（けっして団体客中心でない）廉価でスピードのある「アシ」の確保が望まれる。つまり貸切りバスや航空会社バスに交通ネットワークの代替をさせることなく、FITまた、リピーターが自由に 自己の裁量で訪問先を選択できる状況が好まし

いと考えられる。通常、観光バス（団体貸切観光、オプション・ツアーを含む）では、最も効率的に手際よく、歴史的景観や文化財等の観光スポットを周遊するが、効率的であるが故に、時間的な制約が常に伴うことが最大の欠点である。FITやリピーター等は、既に経験をした観光バスに再び乗ることはない。彼らの観光欲求は、与えられた観光（静なる観光）から自己の欲求にもとずいた観光（動なる観光）へと移行していくのであり、その欲求を満足させるには、利便性のある交通ネットワークが必要であることはいうまでもない。このためには、地区内外交通を利便性のあるシャトルバス、ボート等の運行が必要になる。

現在催行のオプションツアーは、その大部分がグループ（団体）を想定したコース作りとなっており、個人単位としてのツアーは、タクシー観光に頼るため、高額の支払いを強いられることになる。個人の集合体としてのシャトルバス、ボートによる地区間および地区内観光移動は、沖縄観光の高価格感をやわらげる効用と共に、観光行動の自由を保証する効用を持つことにもなる。

## (2)の問題を考察する

台風と雨は、観光にとっては悪条件の際たるものであろうが、しかし、沖縄本土においてこの問題は避けて通ることはできない。旅行会社、その他のパンフレットの広告には、常に美しい海と空が間違いなく「ハレ」の状態で観光客の気を引いている沖縄の光景。しかしながら、観光客はしばしばその期待を裏切られることとなる。悪天候の対策としては、観光客の安全の確保としてのハード面つまり砂防、河川の修理等の治水事業、急傾斜地崩壊対策事業、保安林等の海岸保全事業の推進、災害危険箇所の点検と防止施策の推進等が必要となるが、また観光客と密接な海と交通、マリン・レジャー等の事故防止対策、救難体制の確立、安全性の確保等があるが、ソフト面の充実も同様である。つまり悪天候のとき、どれだけ代替効果のあるソフトを提供できるかということにある。伝説としての半人半魚のヨナタマ（海の霊）が、悪天候を予告し人を助けたように、現代では雨天というリゾートの悪霊から解放してくれるソフトシステムの確立が必要、かつ急務である。このことは(3)と関連していく。

(3)の問題を考察する

わが国では休暇の増大にともない、国民は願望として長期滞在型（フランス・バカンス型）を志向しており、沖縄は北海道に次ぎ長期滞在型観光リゾート適地として支持されている。（図3、表3-1、表3-2参照）

図-3

(5) どこに滞在したいか（全体結果）

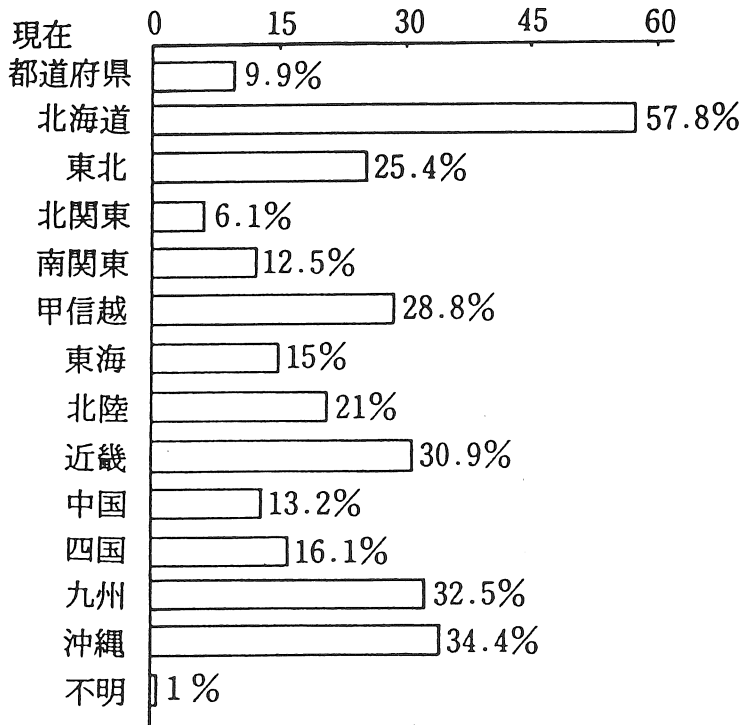


表 3-1

(単位:人)

月別 年次別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
62年	164,400	185,800	227,100	155,400	175,300	166,500	207,800	265,800	165,800	170,200	209,900	156,700	2,250,700
63年	178,000	206,500	250,100	177,100	175,000	179,200	212,200	296,500	182,600	183,800	191,900	162,500	2,395,400
元年	183,400	206,600	260,900	182,800	196,700	231,600	242,900	324,800	224,000	214,100	230,700	190,600	2,671,100

表 3-2 性別・年代別滞在日数

(単位:人、%)

年代	泊数		1泊		2泊		3泊		4泊		5泊		6泊		7泊以上	
	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比	総数	構成比
総																
合計	2,521	100.0	33	1.3	797	31.6	877	34.8	474	18.8	154	6.1	78	3.1	108	4.3
10代	246	100.0	3	1.2	62	25.2	97	39.4	41	16.7	15	6.1	13	5.3	15	6.1
20代	1,019	100.0	12	1.2	278	27.3	343	33.7	246	24.1	75	7.4	31	3.0	34	3.3
30代	460	100.0	6	1.3	152	33.0	149	32.4	85	18.5	25	5.4	10	2.2	33	7.2
40代	360	100.0	4	1.1	134	37.2	127	35.3	45	12.5	19	5.3	14	3.9	17	4.7
50才以上	436	100.0	8	1.8	171	39.2	161	36.9	57	13.1	20	4.6	10	2.3	9	2.1
男																
合計	1,246	100.0	15	1.2	416	33.4	408	32.7	210	16.9	86	6.9	41	3.3	70	5.6
10代	106	100.0	0	0.0	25	23.6	44	41.5	14	13.2	9	8.5	4	3.8	10	9.4
20代	447	100.0	5	1.1	114	25.5	137	30.7	111	24.8	41	9.2	17	3.8	22	4.9
30代	251	100.0	4	1.6	90	35.8	75	29.9	40	15.9	10	4.0	7	2.8	25	10.0
40代	197	100.0	2	1.0	81	41.1	64	32.5	19	9.6	14	7.1	8	4.1	9	4.6
50才以上	245	100.0	4	1.6	106	43.3	88	35.9	26	10.6	12	4.9	5	2.1	4	1.6
女																
合計	1,275	100.0	18	1.4	381	29.9	469	36.8	264	20.7	68	5.3	37	2.9	38	3.0
10代	140	100.0	3	2.1	37	26.4	53	37.9	27	19.3	6	4.3	9	6.4	5	3.6
20代	572	100.0	7	1.2	164	28.7	206	36.0	135	23.6	34	5.9	14	2.5	12	2.1
30代	209	100.0	2	1.0	62	29.7	74	35.4	45	21.5	15	7.2	3	1.4	8	3.8
40代	163	100.0	2	1.2	53	32.5	63	38.6	26	16.0	5	3.1	6	3.7	8	4.9
50才以上	191	100.0	4	2.1	65	34.1	73	38.2	31	16.2	8	4.2	5	2.6	5	2.6

また、5泊以上の滞在者は平均で総数の13.5%と全国平均の5.4%を上回っている。このように沖縄は長期滞在型観光リゾートの方向を目指しているが(2)で指摘した天候に対するソフト的対策が問題となる。筆者の体験だが3泊4日一人旅でラプリーサンセット・リゾート(恩納海岸地区)に滞在(3泊とも同一ホテル)したことがあるが、不幸にも半日曇で、残りは全て雨という目にあつた。海は荒れ、ビーチで泳ぐこともできず、1日はホテルの施設(レストラン、バー、ショッピング・アーケード、プール等)の全てを利用して過ごすことを試みたが、太陽の下、ビーチでの水泳、読書、水着だけの解放感、の欲求の代替効用を満足させるものではなかつたので、残りの3日間は他のリゾート地区を周遊することにし、タクシーで各リゾートホテルや文化施設、道端にボツと1軒だけの画廊、地元の人だけが利用する食堂、バー、難しい沖縄の言語を楽しみながらのショッピング、米軍基地の兵隊が利用するレストラン・バー等、また沖縄の人たちのホスピタリティーあるもてなしに感激しながら、自己の欲求が十分に満足させられているのに気づいたことがある。ちなみに、滞在中のタクシー代は約5万円であつた。

滞在客のリゾートホテルで過ごす時間は、昼の時間と夜の時間に分けられる。夜の時間については、雨であれ晴であれ天候にそう影響されないのが普通であるがしかし、筆者の体験からしても、現在のほとんどのリゾートホテルが囲い込み型となっているために、2日目の夜の時間が満足できない。また、近所にある廉価なコンドミニアム、ホテル等の宿泊客が、情報の不足から夜を楽しむために、リゾートホテルを訪れることはほとんど無いのが普通である。リゾートホテルが囲い込み型から解放型になり、各リゾートホテル間のコミュニケーションがスムーズにとれることになれば各々の地区の観光資源をバラエティーあるものにする。多様な海岸、ビーチ 多様なマリンスポーツ、特色ある各種レストラン、バー、ナイト・ショウ、それに地元の文化施設、琉球舞踊、琉球音楽、沖縄料理(琉球王朝料理だけを指しているのではない)、陶芸、草木染め等を加えることで、滞在客は飽くことがなく長期の滞在を雨天のときでさえ満喫できることになる。つまり地区内のコミュニケーション・ネットワークの整備が必

要となる。

## 6 提案

沖縄県はリゾート法の適用を受け、沖縄本土において前述したプロジェクトが推進されつつあるがしかし、沖縄本土内の諸問題のほかに大きなネックとして航空運賃がある。すでに韓国、ハワイ、グアムに商品価格で太刀打ちできない。この高いハードルをいかに越えるかが今後の基本的な大きな課題となる。沖縄は、国内で初めてマリンリゾートをライフスタイルとして大衆にアピールしたことは評価できるが、民活利用の利権的ハードの促進のために、本論で指摘した交通網の整備、ソフト面の整備、コミュニケーション・ネットワークの整備が不足している。今後の方策指針として次のことが考えられる。

### ①ホテル宿泊費からの解放

(宿泊費逓減制および個人予約割引制の導入)

同一ホテルでの宿泊日数が増すごと宿泊料金は逓減される(例えば1泊目は100%、2泊目80%、3泊目50%、個人客が3ヵ月前に予約をすれば30%割引、1ヵ月前20%、15日前10%割引)制度や雨の日割引制度、長期滞在割引制度、オフ・シーズン割引制度などを個人客を対象としてアピールしていくこと。宿泊費の多様化は客の選択を自由にさせ、硬直した高額な宿泊料金から解放させることができる。

### ②食事からの解放

地区内コミュニケーション・ネットワークが機能することで、定められた食事の時間からの解放、定められたメニューからの解放、そして、食事料金の選択、による解放などである。心身をリラックスし緊張感からの解放や、日常の時間からの拘束の解放を求めてリゾートにやってくる人々にとって、現在ほとんどの宿泊施設が採用している食事時間制度は、その経営上必要な事は理解できる。がしかし、そのために客に犠牲を強いているように見えるのは、宿泊施設以外での食事が自由に、そして簡単にできるネットワーク・システムが出来ていな



い、つまり宿泊施設とその周辺地区の食堂・レストランとの協調が皆無であることによると考えられる。地域の活性化の為のリゾートが叫ばれていることを、空念仏に終わらせないことは、客にとって、リゾート生活の中で最も大切な、「食事」を充実させることでもある。

#### ③プライベート・ビーチの解放 —有料から無料へ—

万座ビーチ、オクマビーチ等沖縄本島には、24の優良ビーチがあるが、その内の17が有料で、無料なのは沖縄海中公園、名瀬市民ビーチ等、わずか7カ所である。リゾートホテルの囲い込み型が有料化を進めているとすれば、行政指導、もしくは条例、法制化によつての解放、無料化が望まれる。ビーチと国道との間の空地は有料駐車場、有料更衣室やシャワー施設となり、ビーチにはビーチ使用料（施設利用料）を支払わなければ、ビーチで楽しむことができなくなった地元住民や他の低価格宿泊施設利用者にとって、リゾートが持つ本来の環境資源、天然資源の効用を奪い去っていることになる。地元住民の協調、協力なくしてリゾートの発展と、それにとまなう地域の活性化も有りえないとすれば、この有料化は不思議であるといえる。

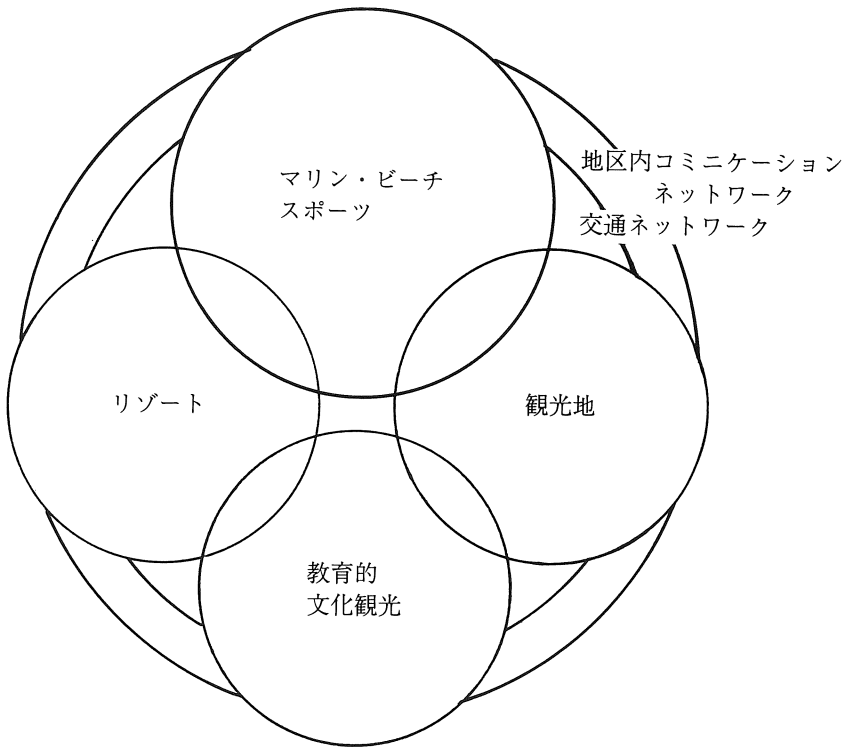
#### ④囲い込み型からの解放、そして悪天候の克服

沖縄県だけではなく、全国各地の民活利用リゾート開発の問題として、囲い込み型問題がある。リゾート開発会社は、投資資金の早期回収の手段として、利権的囲い込みをせざるを得ない宿命にあることは、理解できるが、しかし、そのことで囲い込み型が容認されることとは別である。ワイキキビーチ、ロングビーチ、サンタモニカ、コパカバーナ等、世界の有名リゾート海岸を例にするまでもないが、もし、ワイキキビーチがビーチ沿いにあるホテルの、それぞれのプライベートビーチであり、有料であったらと考えれば、囲い込み型がいかに日本的な利権的リゾート開発構造となっているのが解る。豊かさを感じる生活、生活者重視の社会が国民的課題となっている現在社会において、目的において逆行するような、地元住人や利用者（客）をないがしろにした開発、政策には疑念を生じせざるを得ない。囲い込み型からの解放は、地区内コミニ

ケーション・ネットワークを促進し、リゾート開発本来の目的である地元を活性化させる。また地区内のシャトルバスによるネットワークの充実、滞在客を晴天であれ雨天であれ、天候から解放し滞在時間を充実させ、滞在客の行動を点から線へと拡大していく。このことは滞在日数の増加を助長し、消費の増大を促し、経済効果をより促進していくに違いない。

図-4

リゾート地域・関連図



### ⑤人材の育成と解放

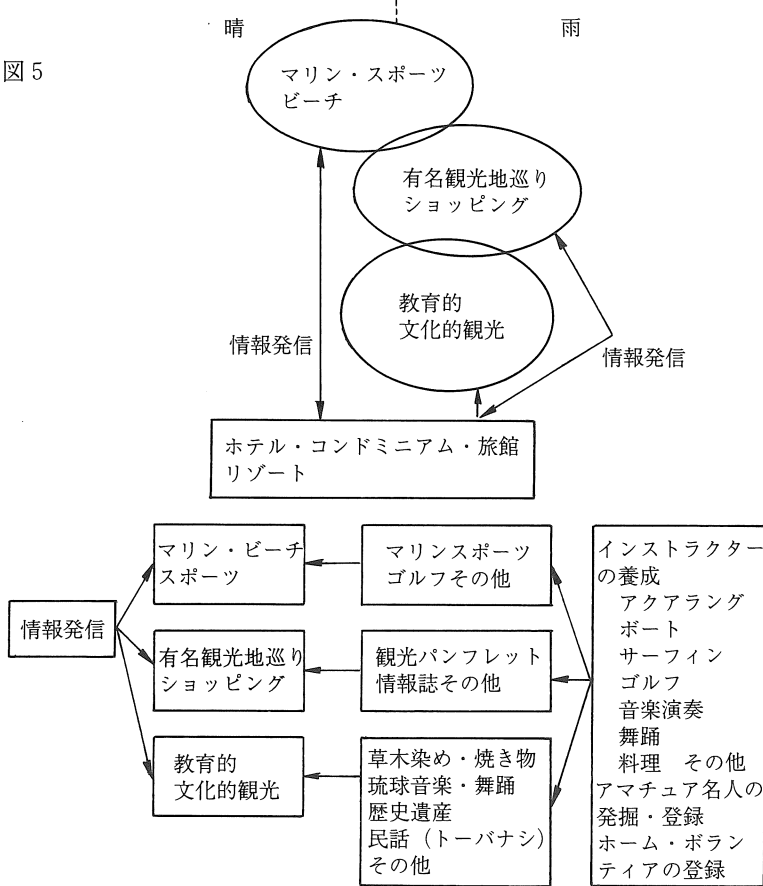
サービス業の一つであるリゾート産業は、その末端において、個々の客との接触（接客）から逃れることができない宿命にある。つまりは客と直接に接する「ヒト」のサービス努力を軽んじて、リゾート産業は成り立たない。ここではサービスの理念について論じることは避けるが、日本人にとって、欧米に比較すれば、苦手な分野であることには違いない。しかし、沖縄が国際的リゾート地を目指しているならば、サービスに携わる人材の確保が急務である。現在、沖縄では沖縄水産高校で海洋観光コース、宮古水産高校でマリン・スポーツコースが設置されている。またヴィラ・オクマリゾートでは、近年人気が高いダイビング専属のインストラクターを独自に養成しているが、各分野での人材不足は覆うべきもない。サービス人材の確保については前田豪の観光・リゾート計画論が詳しく述べているが、その中でも宮崎県方式が沖縄にとって優れていると考えられる。それは、例えばスキューバー・ダイビング連盟といった組織と提携し、且つ日本野鳥の会といった非商業的組織とも提携するとともに、各市町村の「遊びの名人」もリストに加え、インストラクターやガイド、遊びの名人の供給を一つにまとめ、さらに観光協会、婦人団体、青年会議所等の参加を得て、社団法人的な組織を設立し運営し、各リゾート地に情報を提供する方式である。（図5参照）

リゾート施設が独自に人材を養成し、それを維持することは経営的にもかなりの困難があるが、宮崎方式の採用によることである程度、人材確保のカバーができ、加えて、地区地元住民の協力を得ることができれば、地区の活性化を促し、コミュニケーション・ネットワークの拡大にもつながっていくことになる。このような背景作りは、リゾートの従業員や地元住民のきめ細かな、そして高度なサービスの習得意欲を促進させ、沖縄の人が伝統的にもっているホスピタリティ・スピリッツと共にハートフルなリゾートを作りあげていく。

数年前に2泊をコンドミニウムに滞在し夕食をそのレストランで取った。テーブルには白い綿のテーブルクロスが美しく、その上にはキャンドルと可愛い花が飾られ、窓からの星と、素晴らしい雰囲気醸し出していたが、ワインとディ

ナーを注文した後で、不思議なサービスを受けたことがある。それは、最初にステーキがサービスされ次にスープそしてワイン、オード・ウーヴル、フィッシュ、サラダ、コーヒー、フルーツという順のサービスであった。しかし、ウエイトレスのにこやかなテーブルサービスは、十分に沖縄を感じさせるものであった。このことは、沖縄のみならず日本の観光文化のレベルを象徴しているのではないだろうか。人材の解放は、専門知識を持った人の職業化を意味しているのではなく、特技を持つ「ヒト」の発見、そして協力を得ることを意味している。各々の専門知識をお互いに学び、教え合う環境をつくることによるレベルアップされたサービスは、沖縄のホスピタリティー・スピリッツと自然に融合し、国内外の客を暖かく迎え入れる人材を多く育成するに違いない。

図 5



## 7 むすび

経済不況の現況において、価格競争はますます熾烈化する。国内旅行での高額な航空運賃問題を除いて考慮しても、現在の沖縄の高級リゾート中心の構成商品には今後の価格競争に勝ち抜いていけるかどうか疑問である。ハード中心からソフトをしっかりと中央に据えたりリゾートへと大きく発想を転換し、新しいリゾート哲学をもち、国際的価値観にもとづく国際観光地沖縄への変革が行政当局をはじめ関係企業、地元住民に求められている。

沖縄は、言語学的にも日本人であることは明らかであるにもかかわらず、その歴史は薩摩の沖縄支配（1906年）による圧政や明治から昭和20年までの日本政府による政策は、悲惨ともいえる労苦に満ちたものであり、その後のアメリカによる占領政策、そして沖縄返還（1971年）と沖縄県民は歴史の波にもまれつつも琉球王朝以来の独自の文化風俗、そして誇りを保持し続けている。薩摩に反抗する民話「モーイ親方」の精神は、明治時代にも、そして現代にも引き継がれ沖縄県民の人々が結束しあう強固な県民意識、同族意識、複雑な歴史観を持つ県民気質を作り上げているように見える。その気質は「ウチインチュウ」（内の人、つまり沖縄人の意）、「ヤマトンチュウ」（大和の人の意）のように、沖縄人以外のとりわけ本土人に対する警戒心（鹿児島県人には最も強い）、不信感は根強く、過去の歴史の反省とともに、常に一線を画する傾向にあると言われているが、基本的には陽性で明るく解放的な気質でもある。「イチャリバ・チョーデー」（行き会えば兄弟）は極めて親密度の高い言葉であるが、ハワイにおけるアロハ・スピリッツを想起させる言葉でもある。国際観光地沖縄にとってイチャリバ・チョーデー・スピリッツを理念として中心におき、ハートフルな沖縄を目指し、さらなる工夫が望まれる。

参考資料・文献

リゾート沖縄マスタープラン	沖縄県企画開発部	平成2年
気象年鑑 1922年度版	気象庁	
全国観光データバンク	トラベルジャーナル	
	(株)トラベルジャーナル	平成4年
沖縄観光の現状 平成4年度版	沖縄県観光文化局	平成4年
日本の民話	日本民話の会	
国内観光の動向と観光開発	今井成男・原重一	
国際観光入門	松本達也 高文堂出版	平成5年
観光白書 平成5年度版	総理府	